

優秀者作品発表

最優秀賞

日本での体験から

東日本大震災という人生の転換点を振り返って

Doan Le Hai Ngoc

ドアン レ ハイ ゴック

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専攻

2011年3月11日。コンビニエンスストアでアルバイトをしていた私は今まで経験したことのないような、大きく、激しい揺れを感じた。地震で電車が止まったことを知ると、同僚は徒歩3時間もの距離がある私の家まで一緒に歩いて帰ることを決め、店長は非常食としてお菓子和飲料をたくさん詰め込んだ袋を私に渡してくれた。皆、自分の心配よりも来日したばかりで左右もわからず、地震とは縁がない国から来た私を第一に考えてくれたのだ。帰宅途中、崩れたブロックや家屋を目にして衝撃を受けても心細く感じなかったのは、彼らの優しさがあったからだ。

災害の数日後にテレビをつけると、家が丸ごと、まるで砂の城のように津波に流されている映像が映し出されていた。その時になってやっと初めて、今までテレビで見てきた遠い世界での災害が「他人事」ではなく、自分のすぐ近くで起こっていることだと実感した。私は幸いにも被害が少ない東京に住んでおり、周りに助けてくれる人がたくさんいる。けどテレビに映っている彼らはどのようにこの惨劇を乗り越えるんだろう？

被災地の力になりたいという気持ちが私の中で徐々に大きくなり、震災の1年後にボランティアサークルの一員として宮城県南三陸町を訪れるきっかけになった。被災地では、瓦礫が続いている光景だけではなく、匂いや風、埃っぽさを五感で感じることができ、ここでは災害はまだ決して終わってはいないということが嫌でも脳裏に焼き付けられる。車が防災対策庁舎を通った時、サークル代表がぼつりとここで亡くなった危機管理課の職員である遠藤未希さんについて話をしてくれた。彼女は亡くなる直前まで休むことなく地域住民に避難を呼び掛けていたのだ。震災時に自分より他人を優先した人は彼女だけではない。同じ県内の女川町に住む水産会社の専務は外国人研修生20人を高台に避難させ再び宿舎に戻った際に津波にのまれた。この会社の社長は自宅が流され身内が行方不明になる中で、友達に頼み込み、研修生達の宿泊場所を確保した。その結果、女川町に住んでいる研修生で犠牲になる者はいなかった。彼らの話を聞き、自分が被災した頃を思い出し、「どこにいても、自分が大変な時でも他者を思いやる日本人の優しさは変わらない」と感服した。彼らが命を犠牲にしてまで守ろうとしていたこの地域を立て直したいと意気込んだ。

しかし、いざ作業に入ると身体が思い通りに動かない。私達の仕事は空き地に公園を作ることと人手が足りない畑作業を手伝うことだったが、私は桑もとんかちも持ち慣れていないので手際が悪く、被災者を目の前にしてどんな話をして良いかもわからなかった。何回ボランティアを続けても上手く立ち回れない自分の無力さをただただ、感じるばかりだった。それでも訪問を続けているうちに、

徐々に自分の顔と名前を覚えてくれる人が増え、感謝の言葉を直接口にされることが多くなった。「部外者だから話せることもあるんだよ。話し相手になってくれてありがとう。」「失ったものを数えるのではなく、今あるものを数えるべきだ。今の私たちを支えようとしている人たちがたくさんいる。その中には、ゴックちゃんのように留学という短い時間を割いて来てくれる人もいる。それだけで元気になれるよ。」「いつもベトナムの話を聞かせてくれてありがとう。早く生活を落ち着かせて、ベトナム旅行に行きたい。」

私は微力ではあるが無力ではなかった。私は留学生として、私なりに地域の人の役に立っていたのだ。個人レベルでの復興支援は力仕事を伴う大掛かりな作業だけではなく、義援金を募る、住民の話し相手になるといった些細なことでもいい。それぞれが自分のできることを考え、行動に移したらそれは形こそ違え、立派な支援になることがわかった。

東日本大震災のボランティアで、私は日本人の苦難に負けない芯の強さとそこから生まれる他人への優しさを間近で見ることでより日本を好きになった。そして、災害は他人事ではないこと、復興支援には様々な形があるということを身にしみて思った。この人生の転換点があったからこそ、私は大学卒業後、学友が就職の道を歩み始める中、大学院進学の道を選んだ。災害について研究を行うことも復興支援の形の一つだと考えたからだ。自分の研究成果で日本、ベトナム、ひいては世界中の人々を災害から守る制度を創ることが今の私の夢だ。



写真1 公園で使うベンチのペンキ塗り



写真2 住民の方との交流

優秀賞

日本での体験から

「介護は温かい」

ルオン マイン ホアン

EPA 介護福祉士候補生

介護は温かい事です。

ベトナムからまいりましたルオン・マイン・ホアンと申します。

介護福祉士候補者として東京都大田区にある介護老人保健施設セントラル大田で働いています。

私にとって日本と言えば、富士山、桜、お寿司、お城が有名で、子供の頃から日本に住みたいと思っていました。大学を卒業した後にEPAというプログラムに参加して、日本に来る事が出来ました。

日本に初めて来た時、びっくりした事や、困った事が沢山ありました。

私は、看護師免許を持っています。私の介護に対しての考えは、大変な仕事だと思っています。

排泄介助、食事介助とかの技術は全然知らないし、利用者様と会話する時も「ベトナムなんて知らないよ」「名前は何て言うの?」と何回も言われて気持ちが落ち込んでしまいました。また、2ヶ月程、ホームシックになってしまい、毎日一人で過ごしたり、友達も近くにいないし、日本の冬が来たりして、すごくストレスになってしまいました。その時の気持ちは今でも忘れません。しかし、このままではダメだと思い、一步一步前向きに進んでいくように頑張って仕事に取り組んできました。毎日利用者様の笑顔を見て、その内、利用者様から「ありがとう」と感謝の気持ちを言うようになるようになり、本当に嬉しかったです。その中でやる気も上がってきて、普段の生活にも慣れ、コミュニケーションや、介護技術が少しずつ上がってくるようになりました。

ある利用者様が落ち着きなく動いている時、私の所に来ました。私はその利用者様の手を握って差し上げると、びっくりした表情で、「なぜそんなに手が温かいの?」と私に聞いてきました。私は「心が温かいから手も温かいんですよ」と答えました。そうしたらその利用者様は満足な顔をして、私の手を持ったまま車イスに座った状態で寝てしまいました。少しして、利用者様が目を覚ましたときに「温めてくれてありがとう」と言ってくれました。その時は、本当に嬉しく思いました。

国や民族が違う事は関係なく、一人の人間として温かい気持ちを吹き込むと、人間関係は美しくなるのだと思います。介護というのは心に気持ちを吹き込み、支えあいながら介助をするのが一番良い方法なのではないでしょうか。

1年間の間にセントラル大田の先輩達から沢山の事を教えてもらい、自分でも介護技術が上がってきたと実感しています。自分の気持ちとしても、冬が過ぎて、春になり桜が咲いてきた季節になって、冬から残る気持ちが全部消え去って、さっぱりした気持ちになりました。今では、日本の生活と、介護の仕事にものすごく強い気持ちで取り組んでいます。

これからは介護福祉士の試験に向けて勉強を沢山頑張って、熱血な気持ちと強い心を持てば何でも出来ると思います。介護は温かい仕事ですから。

努力賞

日本での体験から

過去を忘れずに将来に向う

グエン タイ ズオン
防衛大学校

私は、グエン・タイ・ズオンと申します。今、防衛大学校の三年生です。ベトナムの軍事士官学校から初めての航空要員として日本に留学してきました。今まで四年間日本にいた経験からいろんな感じたことを皆に伝えたいと思います。

私は子供の時に、ベトナム国の歴史から、素晴らしい伝統的な民族の愛国心を教えられました。国が侵略された時に民族が一丸となって国を守るためにどんな強い敵が相手でも最後まで絶対に負けないで戦う気持ちに、戦争を知らない若い世代の私たちも本当に感動させられます。それで、私は中学校の時から私の家族や子供たち、可愛いベトナム女性たちを守ろうと心の中に決めました。軍人になるという夢があることで、自分の体力も知識も向上させるように頑張りました。高校を卒業して試験を受けてベトナム技術士官学校に受かりました。軍人になりたいという夢が本当に叶ったのです。ですが自分はまだまだ足りない物がたくさんあることも良く分かっています。だから日本に留学することにしたのです。

日本に来る前にテレビやインターネットでいろいろな話を探し、忠犬ハチ公の感動的な話から日本人にとって仕事のプレッシャーでストレスが大きいという話まで読みました。それで日本が第二次世界大戦が終わって敗戦国から世界第二の経済大国にまでなれたのは、規律が厳しくて意識が高い日本人の人々が頑張ったからだということもよく分かりました。私はベトナムの軍人の代表として自分を鍛錬するために自分なら出来る、何も心配することはないと信じて日本に来ました。

日本に来てまず電車の便利さをびっくりしました。そればかりでなく、先輩と電車に乗ってどんなに混んでいても電車の中が静かなのは、ひとりひとりが他人に迷惑をかけないように気を使っているからだ分かりました。日本人には、自分だけでなく周りの人のことも考えるという高い意識に基づく社会のルールがあるのだという印象を持ちました。新しい環境の中で自分が何を出来るかとわくわくしました。そして先輩に教えてもらいながら、忙しい人たちの間で日本の生活を始めました。

私は防衛大学校という特別の環境で知識、意識と体力をいろいろな場面で訓練しています。学校での授業や勉強だけではなくほかのもののバランスを一番大切に考え、校友会の活動で体力とスキルを学生に身につけて学生舎での合同生活を通して団結と協力することの大切さもおそわっています。学生と学生は見えない紐でむすばれています。各人が自ら考えて判断することで、仕事ができるようになることを目標とします。

将来、日本の指揮官として成長する学生たちには色々な方法でいろいろな時間にいろいろなことが教えられます。私は一年生の時に海に八キロメートル泳ぎました。私はベトナムで突然“八キロ泳げる？”と聞かれたら絶対“できない”と答えます。理由はやったことがないのでこんな長い距離に泳げないと思い込んでいるからかもしれません。ですが、一か月の間訓練して友達とお互いに助け合い、教官からアドバイスしていただくことで私は無事に8キロ楽しく泳ぐことができました。人生も同じです。高い壁があると絶対にできないと思いますが、絶対にあきらめず、全力を尽くして頑張れば必ずできます。やったことないからできないというのは理由にならない。“できないのはまだやらないだけなのだ”とその時に気づいてました。その時、私は一年生にすぎなかったのが、それから四年間たって色々な訓練と教育を受け、たくさんのことを体験できました。日本に来なかったら絶対できなかっただろうこともたくさんあります。

当然うまくいかない時もあります。文化も違うしお互いに理解できない場合もあります。しかしながら日本人の友達と生活する時に、自分は国の代表だということをいつも意識して、言葉の壁はあるけれども、これを乗り越えて日本人の友達に負けないように日々頑張っています。

私たちは外出時間は休日だけに限られています。長期休暇を使って観光地に行ったりスキー等に行ったり、ベトナム留学生サッカー大会に参加したりしています。たくさんさんの友達が出来て日本の文化を深く理解したいと思います。

私はあと一年半後に卒業しますが、自分の目標に向かって頑張ります。助けてくれた友達や教えてくれていた教官や体験できたことも一生忘れないでしょう。そして、日本とベトナムの両国関係に自分の力で貢献したいと思います。



努力賞

日本での体験から

アルバイト先での思い出 優しいおじいさん

NGUYEN THI NGA

グエン ティー ンガー

麗澤大学

私はベトナムから来た私費留学生です。今年は日本に来て三年目になります。多くの留学生と同じく私も学校に通いながらアルバイトをしています。三年間という長い時間で学校やアルバイト先でたくさんの出来事や思い出があります。中でも感動的で一番私の心を暖めてくれる思い出はこの話でした。今でも思い出せば嬉しく泣いています。

それは2014年の冬のことでした。ベトナムという暑い国から来た私はまだまだ日本の寒さに慣れていないせいか、手や顔の肌がひどく荒れていました。薬を塗っても、なかなか治らないものでした。私はマクドナルドのレジの仕事をやっていましたので、手が荒れているままで接客するわけにはいかないと思いました。しかし、朝一番から代わりに出勤してくれる人がいないので仕方なく私は手の痛みを我慢してアルバイトを続けました。ちょうどそのとき、いつも朝から来店してくれるおじいさんが私の両手を見てこう言ってくれました：「グエンさん手が荒れていますね、痛いでしょう?!」。そう聞かれた私は、嬉しく思いながら「ありがとうございます、大丈夫です。」と答えました。そのおじいさんとは初対面ではないのですが、オーダー以外の会話はしたことがありませんでした。今日おじいさんが気をつかってくれて、私は本当に有り難く感じていました。家族や親友ではないのにおじいさんが優しくしてくれて、非常に感激していました。

おじいさんとの会話は私の答えで終わって、おじいさんは店内の席へと向かいました。私も仕事が忙しかったせいか、あとで気づいたらおじいさんがどこかに行ってしまいました。ぼんやりそう思っていたら、おじいさんが入口から私が立っているレジまで来て、カバンの中からはんそうこうと手荒れの薬をくれました。おじいさんがニコニコしながら、「これを塗ったらすぐ治るよ」と優しく言ってくれました。そうやってくれたおじいさんを見て、私は泣いてしまいました。「ありがとうございます」とまだ言えずに泣いてしまいました。そのとき、おじいさんだけがニコニコしていました。他のスタッフと近くにいたお客さんも一瞬おじいさんの優しさに驚いて止まっている様子でした。

私は断ろうとしたら、おじいさんが「断らないで、受け取りなさい」と私の前においてから、帰ってしまいました。あまりにも感動していた私はどうすればいいかわらなくなってしまうました。次の日におじいさんに会ってちゃんと感謝の気持ちを伝えられましたが、私の中にはまだまだ何か申し訳ないような、恥ずかしいような気持ちでありました。

おじいさんはそのあと毎日来店し続けてくれて、いつもの優しい笑顔で来てくれました。店内に入ると私だけではなく、他のスタッフにも、周りのお客さんにも気をつけて明るく話しかけてくれました。私は外国人だから、私は学生だから、私は若いからではなく、おじいさんがくれた優しさには人から人への優しさそして気配りだと思っています。おじいさんがくれた薬は効くか効かないか関係なく、私はずっとおじいさんに「ありがとうございます」と言い続けたいです。私のアルバイト先はいつも混んでいて毎日疲れていましたが、おじいさんがくれた優しさを思い出せば心が何より強くなれました。私は学校とアルバイトを両立できたのも、おじいさんのおかげだったと思っています。

私は大学に行ったためマクドナルドのアルバイトを続けられなくなり、おじいさんにもう会えないかもしれません。しかしこれからもきっとおじいさんが私のことを応援してくれていると信じています。そう思うと私の心が和みます。

その日は冬の日でしたが、全く寒くありませんでした。

努力賞

日本での体験から

Nguyen Hai Anh

グエンハイ アイン

立命館アジア太平洋大学

大学に入学するにあたり、大分県別府市に住むことになりました。同時に、両親から離れ、本格的な一人暮らしも始めました。そして、一年生の頃から「泉光こども園」で英語の先生というアルバイトをしています。そこで様々な人と出会い、特に先生たちと子供たちのやりとりを通じて児童教育に関して非常に関心を持ちました。

授業中に子供はよく友達と喧嘩して泣き出します。ベトナムなら先生が最初に行った行動は泣き出す子供をすぐ慰めることです。イジメられたから泣いていると考えるのは通常ではないでしょうか。しかし、日本の先生はそうはしません。全員に原因を聞いた上で適切な対応を選ぶのです。要するに、誰が悪いとかどちらのせいだとかいうよりも、なぜ喧嘩したか、次に同じことが起きたらすべきことは何かということをお子に知ってもらおうほうが大切なのです。そうすれば子供が甘やかされず、わがままにならないだけでなく、物事を公平に判断する力も身につきます。

授業後に私はよく子供たちと一緒に昼ご飯を食べます。ある日、給食担当の先生が料理の説明を間違ったらしく、それに気付いた5歳の男の子が先生を指摘しようとしていましたが、なかなか言えずに黙っていました。そのまま黙っているかと思いきや、担任の先生がその子に向かってこう言いました。

「自分が正しいって思ったら先生に言ってみ。先生たちも時々間違えるから。」

その後、間違いを指摘された給食の先生が子供達にきちんと「ごめんなさい」と言いました。思わずなるほどとばかりに頷きました。「大人の言うことに従いなさい」、「間違ったら謝らないといけない」という教訓を世界中の子供たちの頭に染み込ませようとしている大人の私たちが、確かにいます。しかし、私たち自身がたまに「大人」というラベルにこだわりすぎて間違いを認めなかったり、さらに面目を失わないように子供に謝らなかったり逆ギレしたりすることがないのでしょうか。本来なら、自分の間違いを素直に認めるべきです。そして、意見をきちんと言うことの大切さも伝えるべきです。さらに、子供の言うことに耳を傾け、素直に応える姿勢を見せることが、子供が習う見本として、大人の私たちが達成しないといけない試練だと思います。

また、同じ給食の時間にもう一つ気づきました。

野菜と果物を自分たちで植えました。役割を分けて、先生と一緒に種蒔きから収穫まで子供達がしました。

私は辛うじて自分の幼稚園の頃を思い出しました。自分で木を植えたことがありません。土を触ると、汚いと心配したから先生達がそのような経験をさせなかったのでしょう。しかし、それが自然と触れ合う機会の妨げとなり、子供が自然の恵みや周りの存在を尊重することも学べなくなるのではないかと、心の奥底で複雑な気持ちが溢れました。

その上、私がアルバイトし始めた頃に疑問に思ったのは、まだ読み書きも学んでいない子供に英語を教えても効果がイマイチであるに違いないのに、なぜわざわざ外国人を雇って続けようとするのかということです。今になってやっとわかりました。早期から英語を学ばせる趣旨は言語能力を向上させるだけではなく、異文化理解の心構えを養うということでもあります。

泉光保育園での日々は私にとって楽しく貴重な時間で日本の児童教育に対する理解を深めながら母国の児童教育の構成を振り返ってみるチャンスとして私の視野を広げてくれました。ベトナムのやり方が悪いと責めるつもりはありません。しかし、日本のように知識と共に子供の個性や自立心、世界観など、つまり、アタマとココロを育むことができたなら子供のため、そしてそれは社会のためになるのではないのでしょうか。

努力賞

日本での体験から

Ta Thi Khanh Hoa

タ ティ カイン ホア

早稲田大学 商学部

キンモクセイの香りが東京の空中で漂っているこの時期が来ると5年前に初めて日本に来たのを思い出します。19歳の時に母国のベトナムと離れて自分の留学の夢を叶えるために日本に参りました。日本は私の考え方や生き方を大きく変えてくれて、未熟な私を成長させてくれました。日本での生活で学んだことはたくさんありますが、日本に来てから一番心に響くのは人の立場に立って相手を理解する大切さです。

大学に入る前に1年半ほど高田馬場にある日本語学校に通っていました。当時、私の来日の目的はとても明確で、日本の名門大学に合格することでした。午前中は日本語の授業があり、午後は大学受験の授業が続くという日々でした。そこで、日本語学校では軽くアルバイトをするような家族の支援と奨学金をいただいていた私のような学生だけではありませんでした。周りにはアルバイトを軽くするどころか、日本語学校に通いながらアルバイトをメインにする学生もいました。特に新聞配達の仕事をすることが多かったのです。彼らは学校に来て授業中寝たり、宿題をきちんとしなかったり、先生に怒られてもふざけていたので、なぜ日本に来たか非常に不思議に思っていました。そして、日本語学校を卒業した後日本の有名な大学に合格した人はいませんでした。正直、当時の私からするとせっかく日本に来ているのにきちんと勉強しないのは非常におかしいと思いました。彼らと仲良くなろうともせず、むしろ自分と違いすぎて悪影響を受けてしまうのではないかと遠ざかりました。そんな私の考えを変えてくれたのは大学2年生の時、日本語学校の先生のお願いでベトナム留学生のサポートというアルバイトでした。面白いことに私がメインで担当したのは昔自分が遠ざかっていた新聞配達の仕事をしている学生でした。学業面では宿題をしなかったり、授業中居眠りしたり、成績も悪くいわゆる「問題児」の学生が多かったです。しかし、相談で彼らの一日のスケジュールを聞いた後、私自身が昔の自分の考え方や行動を後悔し、反省しました。新聞配達の学生の一日は朝2時から始まり、起きてから3時間朝刊の新聞を配達します。その後午前9時から12時半まで日本語の授業で、午後は夕刊の新聞配達があります。仕事が終わるのが午後5時すぎぐらいです。その後晩御飯だったり、家族と少し電話したり、次の日の準備をしたりしたらあっという間に時間が過ぎてしまい、翌朝に備えるために寝に入らなければなりません。そのような生活をほぼ毎日のように送ったら体が持たないのが当然で、勉強したくても集中力が持たないだろうと感じました。それでもあきらめず、日本語学校を卒業したら専門学校や大学や大学院に入りたいという志の強い学生がほとんどでした。仕送りを一切もらわず、自分の力でなんとか学費と生活費を稼いで、よりいい将来が作れるように日々努力している姿勢をみて、自分はまだまだ未熟だったなと気づきました。そこで自分

のできることは彼らの悩みや不安を聞いたり、進学についてアドバイスをしたり、宿題を授業の合間に手伝ってあげたりすることぐらいでした。私が相談相手であることによって、安心して勉強したり、より学校に行きたくなるという感想を学期の終わりにいただいた時には非常に嬉しかったです。やはり、周りにいる人の状況を理解しないと相手から学べたり、尊敬できたりするはずなことが気づかないのだと感じました。

日本で経験したことは私の一生の宝物です。日本にいる間は日々小さいことから日本のいいところをたくさん吸収し、将来日本とベトナムの懸け橋になれるように全力で頑張りたいと思います。